米国におけるメンタリング運動の展開

渡辺かよ子

1．はじめに

本稿は1980年代以降、青少年問題への対応として顕著な成果を上げている米国のメンタリング運動の展開過程を明らかにし、その日本への示唆を考察しようとするものである。米国の青少年問題の深刻さは日本においてもよく知られているが、それへの市民の対応については、これまで殆ど研究関心が向けられてこなかった。

メンタリング運動は地域・学校・企業が連携した青少年の健全育成のための広範な市民運動である。日本のメンタリング研究は、90年代後半からキャリア発達心理学においてその知見と成果が蓄積されてきているが、ごく普通の市民によるメンタリング運動の動向はほとんど知られていない[1]。本稿ではメンタリング運動興隆の背景となった当時の青少年の状況を概観し、メンタリング研究の中心的役割を担ってきたP/PV(Public & Private Venture)による報告書、主要都市の新聞記事分析等からメンタリング運動の展開の分析を通じて、それが示唆する日本の青少年問題への意味を考察したい。

2．メンタリング運動の興隆の背景

1）1980年代の青少年をめぐる状況

今日のメンタリング運動の歴史的起源は、19世紀末のフレンドリー・ビジター（friendly visitor）と、20世紀初頭に非行少年少女の更正支援活動として開始されたBBBS運動（Big Brothers Big Sisters Movement）にある[2]。前者は社会福祉の専門職化によって衰退したが、後者は今日まで各国で献身的な一対一の支援保護活動を展開し、現在のメンタリング運動の中核となっている。ボランティア活動全般への参加率が低下した90年前後においてもBBBSの参加者数は増加し、メンタリング運動はこの時期に急速な発展を見せた[3]。

約百年も前に創始されたBBBS運動の1980年代後半の著しい拡大の原因には、まず1970年代の生涯発達論ならびにキャリア発達心理学において注目されるようになった発達支援のエージェントとしてのメンターへの着目がある。成人中期の発達課題「generativity」と成人前期のメンターの重要性との合致による共時的・通時的な円環的生涯発達支援としてのメンタリングは、セルフメイドマン神話の崩壊と共に、メンタリングの機会に恵まれないために実力を発揮できない女性やマイノリティのためのキャリア発達支援プログラムとして実施されるようになり、この成果を受けて80年代後期には、より広範な青少年問題に対応するための、地域・学校・企業が連携したメンタリング運動が本格的に展開されるようになった。

その背景には、共和党政権下の貧困の問題、殊に青少年をとりまく社会的資本の劣化の問題がある。この時代には、豊かで教育のある人々が社会的成功へのチャンスを掴み、貧しく教育のないものはその機会が与えられない経済的チャンスの再構成は、男女の報酬格差の縮減と同時に女子の経済的地位の二極化をもたらした。その多くが母子家庭である一

人親家庭の全世帯にしめる割合は、1970年には13%であったが、1980年には22%、1987年には27%に上昇し、親以外の世帯主と住む子どもの割合も1970年の6. 7%から1980年にはほぼ一割に達している。父親（あるいは両親）のいない家庭で育つ子どもの増加と共に、この時期には高齢者の福祉の充実と貧困率の低下とは反対に、子どもの貧困率は上昇に転じ、1986年には21%に達していた[4]。

白人の郊外流出と黒人の都市集住傾向と共に、都市部の治安は悪化し、犯罪が子どもに及ぼすトラウマが深刻化していた。シカゴのコミュニティ精神健康審議会の調査によれば、この地域の小中高生1000人のほぼ40%が銃の発射現場に居合わせ、33%以上が殺傷現場を、25%が殺人現場を目撃したことがあるという。同様にロサンゼルスにおいても、年間2000件の殺人の10%から20%は子どもに目撃され[5]、遺児たちは深い心的衝撃を負いながら生きることを余儀なくされている。こうした経験を持つ子どもにとっての世界は安全とは程遠い危険に満ちたものであり、自他に対する不安や怒り、人間存在そのものの脆弱性を知ることによって、将来の夢に満ちた「子ども時代」は失われている。子ども達に30歳になったら何になっていると思うかと尋ねると、「死んでいる」と回答するという[6]。

以上のような都市部での生育環境の悪化が顕著になった1980年代には、犯罪や薬物、飲酒等の非行問題、無責任な妊娠、高校中退率の高さ、学校での武器所持等の青少年問題はさらに深刻を極めていた。12-17歳の重大犯罪者率は1987年には再び増加に転じ、1993年には5.2%に達した。第12学年生の過去一ヶ月の不法薬物使用者率は、1980年の37%から1992年の14%まで低下してきていたが以後再び上昇し、15-17歳女子1000人あたりの出産も1980年代を通じて30から40の間を漸増していた[7]。青少年問題および青少年死亡率には、歴然とした人種と地域間の違いが見られ、失業による地域の長老（old head）の若者への影響力の低下によって社会道徳の伝授の機会が失われ、都市マイノリティの青少年の多くは、アメリカ社会の主流文化とは隔絶された生活を営んでいた[8]。

当時の青少年の状況をカーネギー委員会は次のように総括している。「今日の青年は、かつては批判されていた性的乱交や不法薬物の使用を賞賛する社会に参入している。彼らは安定した親密なネットワークをなす関係性が殆どない都市部や地方都市に暮らし、彼らのアイデンティティを形成する地域コミュニティの感覚は浸食されている。…青年が前代未聞の選択の自由と圧力に直面している時代の変容にあって、青年としての必要と同様、子どもとして必要な指導があまりにしばしばなされないまま放置されている。子ども時代の依存状況から解放されながらも、未だ大人に向かう自らの道筋を見つけられず、多くの青年は孤独という絶望に苛まれている。自身と同様の混乱した同輩集団に囲まれ、あまりにも多くの者が有害で致死的結果をもたらす貧しい決定を下している。」[9]当時の「優秀性」を求める教育改革は、子どもたちの真の必要に合致せず、「青年初期の子ども達の殆どは、多人数の個人的接触のない学校に通い、見るからに断片的でばらばらなカリキュラムから学び、学校には良く知った信頼できる大人は殆ど存在せず、健康への配慮やカウンセリングを受ける手立ても欠いている。こうした幾百万人もの青少年は、彼らが健全で思慮深い、

生産的な大人になるのに必要な指導や注目を受けられないでいる。」[10]

2）青少年の苦境に対するミドルの対応

青少年をめぐる深刻な状況に対し、各地でミドルを中心とする青少年の健全育成に向けた動きが始まっていた。ワシントンD.C.でのギャング集団が地域の純真な青少年の役割モデルになっていることへの抗議とメンタリングへの呼びかけが、そうした事例の一つである。「薬物への関与から逃れるか、あるいは薬物強要者を永続的な唯一の役割モデルとしようかどうかの決定の岐路にたっている若者に何が起こっているのか。これまで以上に今日我々は同胞の子どもたちを保護しなければならない。もし我々の都市の子どもがある種の純真さ傾向を保持すべきであるなら、我々すべてがそれに向け協力しなければならないであろう。教会や組織が、成人男女と幾千もの危機的状況にある少年少女とが恒常的に触れ合う一対一の関係性を築くメンタリング・プログラムを開始した。しかしこれだけでは十分ではなく、倍増、さらにその倍増が必要となる。…この都市の心ある人々が気概をもってこの問題に何らかの働きかけを行う時がきている。この都市の幾千もの子ども達が重大な岐路にさしかかっている。我々は彼らがその純真さを統合ないしは犯罪に転換する決定に際しての援助ができる。」[11]この記事の青少年を苦境から救おうという呼びかけに55人が応答し、SOSボランティアと称されるメンターとなった[12]。

こうしたメンタリング運動の推進は、80年代米国の中間階層の生き方、「心の習慣」から来るものであり、中年となったベビーブーマー世代の1960-70年代以来持続する理想主義、市民的良心から生じていると捉えられる。「ライフ・スタイルの飛び地」で「個人的野望と消費主義」に生きつつもそれに満足せず、様々な方途で自己中心的生き方を超越しようとしていた[13]中間階層にとってのメンタリングは、競争と奮闘の場である公的世界と、その競争を耐えうるものにしている意味と愛に満ちた私的世界からなる分裂した生活世界に一貫性と統合を与えるものであり、他者との深い関係を結ぶことを通して人生に意味を見出そうとしていたこれらのメンター側の願望にも合致するものであった。

ベビーブーマー世代にとってメンタリング・プログラムは以下の点において魅力的であった。第一はその単純さである。貧困等の社会の構造的問題に際しても、メンタリングは一人の当該青少年の必要に焦点化することによって、社会問題を理解しやすい単純なものにした。世のすべての人がその子どもを見捨てようとも、メンターはその子どもを気にかけその将来に影響を及ぼす「少なくとも一人の」大人であることが強調されている。巨大な茫漠とした社会問題の解決は難しくとも、ここに存在する一人の子どものメンターとなることによって、社会問題への責任が現実的な個人の問題に転換され、個人の行動の意味付けがなされる。一人一人が行うメンタリングは社会改革と直接繋がるものとなる。

第二は直接性である。メンタリングは青少年を救済しようとする緊急性と、官僚主義的形式主義を突き抜けようとする願いを同時に満たすことができる。メンターは参加プログラムに義務感をもつ必要はなく、募金呼びかけの必要もない。貨幣価値を介した影響力の行使ではなく、自らの時間と固有の経験や専門的知識によって、直接的に青少年への影響

を及ぼすのである。

第三はメンタリングが社会からの高い共感を得ていることである。メンタリングは個別指導や一般的なボランティア活動のような、中立的客観的なものではなく、メンターを大いに褒め称えるものである。メンタリングは、アメリカ文化において尊敬の念をもって語られる神話性を梃子にして、社会的栄誉として積極的評価を受けている。メンタリング・プログラムに参加するメンターに対する積極的認知は、それがスポーツや音楽などの大衆文化や企業世界において賞賛されていることによってさらに高められている。

第四は合法性である。BBBS の実績により、通常ではほとんどありえない、青少年と「見知らぬ他人」の関係が社会的に是認されていることである。親権侵害やメンターによる青少年の虐待可能性への憂慮は、現実には考えられないことである。

第五は両者の関係の限定性にある。親や里親とは異なり、メンタリングは週のうちの一定時間を共にすごすものであり、互いの関与は一定の距離を保つ限定的なものである。メンタリングを「最悪要素を取り除いた、親役割の最良部分」と述べるメンターや、子どもとの接触には興味があるが親になることには躊躇があるためメンターになっている者もあるように、メンタリングの感情的・時間的限定性がメンターや保護者に歓迎されている。

第六はメンタリング概念の包括性と柔軟性である。それは個人の達成や進歩、楽観主義等の米国の伝統として捉えられる場合や、「人的資本としての子ども」、労働の国際競争力とも関連づけられることもある。さらにそれは失われた地域コミュニティへの切望、より偉大な市民性の時代や見知らぬ人に対する責任といった事項に言及する場合もある[14]。

上記の特徴を生かし、2002 年現代の National Mentoring Partnership のリストによれば 4400 以上のメンタリング・プログラムが存在している。1998 年の全国調査によれば、成人のほぼ 3 人に一人がフォーマル、インフォーマルを含めたメンタリングを行った経験があるといい[15]、メンタリングは党派や人種を超えた広範な社会運動となっている。

3．メンタリング運動の「進化」

1）萌芽期（1980 年代）

上記のようなメンタリング運動はいかにして今日のような普及を見せるようになったのか。1997 年の P/PV の調査によれば、調査に応じた 721 のプログラムのうち 59%が 1987 年以後に設立され、47%は 1987 年から 1995 年の間に設立されている。BBBS とそれ以外に分けると、BBBS のプログラムの 57%が 1985 年以前に設立されているのに対し、それ以外のプログラムの 74%が 1987 年以後に設立されている。百年の伝統と実践の積み重ねから良質のメンタリング・プログラムを提供してきた BBBS は今日プログラム数としては全体の 35%であり、1980 年代後期から開始されたメンタリング運動は、小規模の新設プログラムによるものである[16]。フリードマンによれば、メンタリング運動が発展した要因に、良質のメンタリング・プログラムを提供しつつもその需要に応じることができず、多くの子どもが待機名簿に載せられたままになっている BBBS のプログラムのもつ限界への対応という要素があるという[17]。メンタリング・プログラムが 1980 年代後期に急増した

ことは、表１の６都市の新聞記事のメンタリングに関連するキーワード検索においても明らかである。これらの内容分析から、以下、萌芽期（1983-1987）、第一拡大期（1988-1996）、第二拡大期（1997-2002）という暫定的な時期区分を行い、メンタリング運動の発展動態を分析していきたい。

＜表１：メンタリングに関する新聞記事数＞

	New York Times : headline~(mentorORmentoring)	*Philadelphia Inquirer* : (mentoring AND youth)	*Baltimore Sun* : title ORLeadORTopics(mentor) and youth	*Washington Post* : title ~ (mentoring OR mentor) and youth	*Chicago Tribune* : headline~ mentor	*Los Angels Times* : (mentor*AND Youth AND Volunteer)
1977				0		
78		0		0		
79		0		0		
80		0		1		
81		0		0		
82		0		0		
83		0		0		
84		0		0		
85		0		0	0	3
86		0		0	1	2
87		0		2	0	4
88		2		0	0	5
89		4		5	0	12
90		4	5	5	0	15
91		10	11	5	2	15
92		11	10	6	2	26
93		17	20	2	1	42
94		17	13	1	8	34
95		18	12	0	6	54
96	14	17	19	1	6	34
97	12	43	9	4	1	62
98	14	23	17	3	3	56
99	16	30	22	5	8	43
00	18	37	30	2	4	42
01	14	35	36	3	4	20

まず、メンタリング運動の端緒についてみると、1970年代後期には確かに今日のメンタリング・プログラムの中核となっているP/PVが創設され、ライフサイクル論やキャリア発達支援に関する研究においてメンターの重要性は脚光を浴びつつあったが、メンタリングは青少年の健全育成に向けた社会運動とはなっていなかった。今日のメンタリング研究の中核を担っているP/PVが1977年にフォード財団の200万ドルの寄付によって設立された当時、カーター政権が危機的状況にある子どものための予算措置を行ったものの、その使途をどうするのか誰もわからなかったという[18]。P/PVは1985年以後、Commonwealth Fundの資金援助によって各種のメンタリング・プログラムの効果研究を行っている。

1983年には健康や福祉問題への貢献を使命とするCommonwealth Fundの年次報告の巻頭言において「メンタリングの復興」が提唱された。青少年と年長者を繋いでいた伝統的な家族や地域コミュニティの消失に対し、これらの繋がりを創出する新しい戦略としてメンタリングの重要性が唱えられ、同財団によるメンタリング・プログラムへの支援が開始された。この時期には1963年のニューヨーク以後各地で活動を展開していた100 Black Menが、1986年には全国的組織として100 Black Men of America Inc.を設立していた[19]。こうした全国的展開の萌芽を1980年代後期に形成していた100 Black Men of America Inc.は90年代以後、アフリカ系青少年の健全育成に向け「未来のための四つの計画」(Four for the Future Plan) を掲げ、メンタリングはその筆頭に位置付けられている。メンタリングに加え、反暴力、教育、経済的発展プログラムがこの団体の活動の焦点とされた。

各地域での草の根運動的メンタリング運動が創始され、例えば1987年にはワシントンD.C.で元教師のSchneiderによってMentors Inc.が創設され、同地区の公立高校と提携し、学習・就職・人格形成の促進に向けたメンタリング・プログラムを開始した。1991年までに参加した500人の高校生の卒業率は95%（市全体は約50%)、進学率も80%という成果を示し、今日までの参加者は3300人に昇っている[20]。

2）拡大第一期（1988年から1996年）

80年代のメンタリング運動の萌芽は、1988年以後の約2年の間に倍増を続け、劇的に拡大した。1992年に各地のプログラムの聞き取り調査を行ったフリードマンによれば、1988年以後の約2年間に、プログラムや支援活動等メンタリングの分野の全貌が現れてきており、この新動向によりBBBSプログラムの6万組とほぼ同規模の活動が展開されている[21]という。1989年にはブッシュ大統領がテレビコマーシャルでメンタリングを推奨し、Points of Light運動が開始され、ニューヨーク市では「メンター年」宣言がなされた[22]。

地方においては、例えば1988年にはボルチモアでAbell財団理事長R. Embryを中心に、教会や銀行、大学、黒人友愛組織の7団体によるProject RAISEが開始された[23]。各団体は6学年生の1学級を担当し、高校卒業までメンタリングを行うこと約束した。メンターは最短一年間、月に二度直接顔をあわせることを含め毎週子どもと接触することが要請され、プログラムのフィールド・スタッフが専門知識を活かし、各学校での講習会や家庭訪問等を行い、「メンターのメンター」となった。さらに第6学年からの介入では遅すぎ

るのという配慮から、第2学年から高校入学年までの期間の支援を行うRAISE IIが新たに開始され、両プログラムで1992年までに450組が活動を継続している。1989年には、先述のSOSボランティア（その後、これはMentor Inc.に合流）に典型的に示されるような各地の草の根運動が叢生した[24]。

この時期には著名企業が各地でメンタリング運動を開始し、従業員にメンターとなることを奨励している。1990年までのこの時期に、例えば、シンシナチーでProctor & Gamble社が全学生の85%がマイノリティ生徒によって構成される地域の高校と連携してProject ASPIREが開始された。同社の従業員は第9学年から高校を卒業してカレッジに入学する年までの5年間、一対一の関係を維持するよう求められた。またワシントンD.C.ではFannie Maeがこの地域の最も貧困な地域の一つにある高校の学生で、成績がB以上の者を対象に、同社の従業員が一対一のキャリア・カウンセリングを中心とする職場でのメンタリングを開始した。1990年までに135人の学生が参加し、同社はメンタリングに加え、各学期500ドルの奨学金も支給している。テキサス州オースティンにおいては1987年以来、IBMが同地の公立学校の生徒で、学校カウンセラーから退学・落第する可能性が高いと判断された学生を対象とするProject Mentorを開始した。このプログラムには同社以外の地域企業のメンターも参加わり、1987年以来900組が参加し、これらの多数を占めるスペイン系学生に対しスペイン語によるメンタリングを行った[25]。

上記の個別企業の支援によるプログラムに加え、企業連合もメンタリング・プログラムを開始した。ミルウォーキーのOne on Oneプログラムは、地域の公立中等学校での退学率の増大（50%）や階層格差の拡大に対する実業界の関心から、Great Milwaukee Committee とGreat Milwaukee Association of Commerceによって始められた。地域の11校が参加し、低所得で「危機的状況にある」と教師が判断した生徒を対象とする同プログラムには、Blue Cross/Blue Shield、Wisconsin Electric and Power Company等の企業、ロータリークラブ等の市民組織、市役所等の職員がメンターとして参加した。従業員は有給のメンタリングの時間を認められ、最短一年間、毎週子どもと会うことが要請され、学習支援や地域行事への参加、自らの職場に案内し職業経験をさせたりしながら、子どもの関心や問題、目標、期待について語り合い、精神的支援を行っている[26]。

各地のメンタリング運動の拡大と共に1990年にはNational Mentoring Conferenceが開催され、労働省長官E. Doleは事業規模に関わらず従業員の少なくとも10%が何らかのメンタリング・プログラムに貢献するよう勧告した。そこには社会問題の解決と労働力強化、国際的競争力の維持が意図されていた。1992年には上院議員Frank Lautenberg等の尽力により少年裁判所非行防止法にPart G：メンタリング、が追加され、Juvenile Mentoring Program（通称JUMP）による奨励金交付がなされるようになった[27]。

1988年から90年に興隆したメンタリング運動は、既存のBBBSを中核に、それ以外の各種プログラムが加わることによって拡大した。この時期のメンタリング運動は従来のBBBSと比べて地方分権的性格を持ち、各種需要に応じた多様なプログラムが企画された。

これらの多様性に含まれる共通項は、危機的状況の恵まれない青少年に一対一の関係性を築く成人ボランティアを募ることにあった。当初のメンタリング運動の興隆は一時的流行であるかもしれないと見る向きもあったが、プログラムの成果に関する実証研究によって運動は拡大した。メリーランド州（1988)、マサチューセッツ州（1990)、カリフォルニア州とヴァージニア州（1993）で州政府によるメンタリングの奨励指導が開始された。

3）拡大第二期（1997年から2001年）

メンタリング運動は1997年に新たな拡大の画期を迎えることになった。同年4月27日から29日にフィラデルフィアで開催された「アメリカの将来のための大統領サミット」(通称メンタリング・サミット）である。これは故ミシガン州知事 George W. Romney(共和党員)によるボランティア活動活性化の提唱に基づき、Colin Powell を議長とし、Clinton 大統領夫妻、元大統領、全閣僚の半数、30の州知事、上院・下院議員、100の市長、数十の企業経営者、宗教・慈善事業代表者、数百人のボランティアが党派を超えて集合し、以後、各地域サミットの開催と共に、企業のメンタリング・プログラムへの協力が拡大した。

パウエルによれば、冷戦終結後の米国にとっての脅威は、アメリカの生活やアメリカン・ドリームから隔絶した、貧困ならび機能していない家庭に育つ危機的状況にある 1500 万人の子どもの存在にあった。その半数が障害を克服し生産的生活を送り、残りの半数は不明であるとすると、道を誤った子どもの生涯に要する社会的コスト（刑務所や生活保護等）は100万ドルに昇り、このまま危機的状況にある子どもの半数がその経路を辿れば、世紀半ばまでに7兆ドルの費用が必要になる。こうした事態の回避のために、危機的状況にある子どもに①メンタリング、②放課後プログラム、③乳幼児期の保健、④市場価値のある教育機会、⑤ボランティ活動によるこれらの支援の返還に焦点づけられた運動、を展開することが決議され、2000年までに200万人の青少年の救援が目指された[28]。

これらの目標達成に向けパウエルは国内の青少年の健全育成に関わる各種組織の同盟として America's Promise を設立し、 550以上の団体が参加した。上記の基本的資源の中でのメンタリングの重要性が次のように述べられている。「メンタリングが最初に掲げられているのは、少年少女の生活に気遣ってくれる大人がいなければ、その子は困難な問題に向かうであろうからである。メンタリングが最初にきているのは、社会が積極的意味を持つメンターや役割モデルを提供しなければ、子どもはギャングや麻薬の巣窟等の街角で自身のそれを見出すことになるからである。最終的に子どもの生活に気遣う大人がいれば、他の四基本的資源の提供に大きな一歩を踏み出すことができる。メンターは子どもに安全な場所と建設的活動を提供し、健康診断や健康上の問題が生じた場合には医者や歯医者に連れて行くことができる。メンターは仕事の世界に関する実践的助言を提供できる。…最終的にはメンターは「単にメンターである」ことによって自生活を市民生活上の教訓とすることができる。話すことは安価であり、子どもは1ブロック先の偽者や偽善者の場所をよく知っている。しかし多忙な大人が詰まった予定表から時間をやり繰りしているのを知る子どもは、百のお説教以上にそれに報いることの重要性を学んである。」パウエルはメンタ

リングの一組に要する費用が 200 ドル、刑務所での一人あたりの年間費用が 25000 ドルであることから、今メンタリングに 200 ドル使うか、それとも同じ子どもが悪の道に入ってから 25000 ドルを使うのかの選択を迫り、次のように述べている。「私達は道を踏み外した青年を拘束しておく刑務所を長年作ってきた。彼らは我々が失敗に導いたから失敗したのである。我々はもはや我々の子どもを失敗させる余裕がない。America's Promise は子どもが成功するよう援助活動を行っており、メンタリングがその先導となっている。」[29]

1997 年以降、各州で、資金援助、審議会の設置、メンタリングのための休業時間の保障、広報等の方途により、メンターの確保等メンタリング・プログラムの充実発展に積極的に指導力を発揮し、支援強化がなされている。また 2002 年 1 月にはブッシュ大統領が「1 月をメンタリング月間」とする声明を発表し[30]、メンタリングの記念切手も発行された。

今日も拡大を続けているメンタリング運動に対し、「偶然のお見合いのようなもの」[31]「ボランティアそのものの虚栄心と限界」[32]、安易な運動拡大によるプログラムからの離脱がメンターやメンティを傷つけることへの警鐘[33]と共に、2002 年にはメタ分析[34]によってメンタリングの実証される効果そのものは全般としてはわずかなものであることも発表されている。これらの課題を背負いながらその克服に向け、メンタリング運動は新たな展開を模索している。

4．おわりに

以上、米国におけるメンタリング運動興隆の背景と発展動向を分析してきた。1988-90 年と 1997 年前後の二つの興隆期に拡大を見せたメンタリング運動の特徴としては、①思想信条イデオロギーを超えた、「個人」による社会改革への取り組みであること。②教育の専門家ではない市民ボランティアの次世代への思い、揺ぎ無い信念が、社会改革の原動力となっていること。③運動拡大の論拠としてのプログラム評価による成果の実証的検討と財政的配慮、が上げられる。

米国の青少年問題の深刻さは日本でもよく知られているが、そうした事態に対し、市民は決して傍観しているのではない。メンタリング運動に示された一人一人の米国市民の良心、社会改革に向けた行動力は、日本の青少年問題への取り組みの根幹に関わる重大な問題提起をしているように思われる。日本においても社会的資本の劣化は急速に進行しており、地域・学校・企業の連携により我々が先行世代から受け継いできた支援を次世代に継承するための何らかの措置を講じなければならない。もとよりメンタリングは万能ではなく、また日米の BBBS 運動の違いに如実に表れているように、社会文化の違いは著しい。そうした文化的な違いに応じた「日本型」メンタリング・プログラムの構築の必要性と一つの実践的可能性を、米国のメンタリング運動は示しているように思われる。

---

[1] 渡辺かよ子「青少年の健全育成のためのメンタリング・プログラムに関する考察：米国デラウェア州の事例を中心に」『言語文化』(愛知淑徳大学) 第 9 号 2001 年。伊藤みのり・伊藤篤「子どもの発達支援法としてのメンタリングおよびメンタルフレンド事業の有効性」『人間科学研究』(神戸大学発達科学部) 第 9 巻第 1 号 2001 年。渡辺かよ子「円環

的生涯発達支援としてのメンタリング・プログラムに関する考察：米国の事例を中心に」『教育学研究』第69巻第2号2002年6月。等。

[2] Boyer, P., *Urban Masses and Moral Order in America 1820-1920*, Harvard Univ. Press, 1978, pp.143-161.

[3] Walker, G., Social Change One on One: The New Mentoring Movement, *The American Prospect*, Vol.7, Iss. 27, 1996.

[4] Phillips, K., *The Politics of Rich and Poor*, Random House, 1990.

[5] Garbarino, J. et.al., *Children in Danger*, Jossey-Bass,1992, p.42.

[6] Goleman, D., Attending to the Children of All the World's War Zones, *The New York Times*, Dec. 6, 1992.

[7] *America's Children: Key National Indicators of Well-Being 2000*, p. 34, 41, 43.

[8] Duneier, M., *Slim's Table*, The University of Chicago Press, 1992, pp. 95-155.

[9] Carnegie Council on Adolescent Development, *Turning Points: Preparing American Youth for the 21st Century*, 1989, p.22.

[10] Ibid., p.13.

[11] Gilliam, D., Who Will Answer the SOS ?, *Washington Post*, Apr. 20, 1989.

[12] Freedman, M., Kindness of Strangers: Adult Mentors, Urban Youth, and the New Voluntalism, Cambridge University Press, 1999 (1993).

[13] Bellah, R. et.al., *Habits of the Heart*, University of California Press, 1985, pp. 290-293.

[14] Freedman, 1999 (1993), ibid., pp. 56-58.

[15] McLearn, K.T., et.al., Child Health : Mentoring makes a difference: Finding from the Commonwealth Fund 1998 Survey of Adults Mentoring Young People, *Child Health and Development*, June 1998, p.11.

[16] Sipe, C. L. & Roder, A. E., *Mentoring School-age Children : A Classification of Programs*, Public/Private Ventures, Winter 1999, Table 1.

[17] Freedman, M., *Kindness of Strangers: Reflections on the Mentoring Movement*, P/PV, 1992, p.20.

[18] Dubin, M., How the Program was Born, *Philadelphia Inquirer*, Jan.27, 1993.

[19] Freedman, 1999 (1993), op.cit., p.3, 5.

[20] Freedman, 1992, p.24.

[21] Ibid., p. 27.

[22] Freedman, 1999 (1993), op.cit., p. 4.

[23] Marbella, J., RAISE Brings Mentors and Kids Together, Baltimore Sun, Oct. 15, 1990.

[24] Freedman, 1992, p.24.

[25] Ibid.,p.23.

[26] Ibid.,pp.23-24.

[27] Freedman, 1999 (1993), op.cit., pp.15-16.

[28] Alter, J., Powell's New War, *Newsweek*, Apr. 28, 1997.

[29] Powell, C.,Mentoring: The First Thing, Dispatch #15, 10/01/1998, America's Promise.

[30] http://www.whitehouse.gov/news/releases/2002/01/20020118-3.html

[31] Shanker, A., Mentoring Reconsidered, March 20, 1994. (http://www.aft.org/stand/previous)

[32] Mosle, S., The Vanity of Volunteerism, *New York Times Magazine*, Jul. 2, 2000.

[33] Freedman, 1999 (1993), op.cit., pp.76-88. Rhodes, J., *Stand by Me*, Harvard University Press, 2002.

[34] Rhodes, J. & Bogat, A. eds. Speical Issue: Youth Mentoring, *American Journal of Community Psychology*, Apr. 2002. Rhodes, J. ed. *A Critical View of Youth Mentoring* (New Directions for Youth Development), Jossey-Bass, Spring 2002.